## ゆめしま海道全線開通

拡大する経済・交流・可能性 (愛媛県上島町)

本誌編集部

ζ. かりの には令和四年三月二〇日に開通したば ぎた辺りで折り返し、生名島と岩城島 見ながら、無人島の平内島と亀島を過 るように走り、弓削島と因島を右手に たヨットは、生名島を左回りに一周す 進力は添え付けられた船外機が頼りだ。 寒い早春の朝、 の間を流れる長江瀬戸へと入る。 ヨット」(後出)の基地のある佐島を出 このセーリング体験を提供する「島旅 艇のカタマランヨット 雲 帆に微風を受けてゆっくりと進む 時折それすらもなくなるため、 の切れ間から青空がのぞく少し肌 「岩城橋」が迫る― 波の静かな瀬戸内海を (双胴船) 目前

岩城橋の開通

線) は、 橋の開通により、 事業で、総工費は約一八三億円。岩城 生名橋(生名島~佐島、 弓削大橋 (弓削島~佐島、平成八年開通)、 の一環として平成二九年に着工された。 興などを目的に、県の「上島架橋事業」 ぶ岩城橋(橋長九一六メートル、片側 愛媛県上島町の岩城島と生名島を結 「ゆめしま海道」も全線開通となっ 町の住民生活の強化や産業振 町内四島を橋でつな 同二三年)に続く

協議会を結成し、 された開通式典で上村俊之上島町長は 旧弓削町・生名村・岩城村が総合開発 弓削島の「せとうち交流館」 上島架橋構想の具体 で挙行 た。 ζ̈́



トの船尾から岩城橋を眺める。左手が岩城島。



上島俊之町長は、ゆめしま海道の全線開通を町内経済や交流人 口の拡大につなげたいと語る。

町 L 町 化に向けて動き始めたのは昭和四 のこと。 民の さつした。 'の発展に尽力していきたい」と、 今後は、 『夢』が叶ったことがとても嬉 それから半世紀以上をかけて、 ゆめしま海道を活かし、 四四

全通による効果について上村町長は 岩城橋の開通およびゆめしま海道 0

たもとに移し、テープカットなどのセ

その後、会場を生名島側の岩城

橋

0

れ

れた。 を楽しむなど大いに賑わった。 ストなど町内外から多くの見学者が訪 て徒歩で橋を渡る一般見学会が行なわ レモニーが催され、 記念撮影をしたり、 上島町民はもちろん、サイクリ 供用開始に先駆け 橋からの眺望

する。 体から採用できるようになるなどメリ 従業員などの確保についても、 るようになることで、 ジャーなどに対するお金が町内に落ち れまで町外で消費されていた飲食やレ 感が生まれることが何より大きい。こ 旧三町村が一体となったことで連帯 課題となっている町内事業者の 町の経済が拡大 四島全



岩城橋の一般見学会は、町内外から訪れた多くの見学者で賑わ った。



岩城橋の完成を機に、 に増やしたいと話す「インランド・シー・ リゾートフェスパ」の今井裕和さん。

入込みなど交流人口 ットがある。 期待を寄せる。 このほ の拡大にもつなが かサイクリ ノスト · の

0

は

弓

削

島

官に建つ

瀬戸

内リ

1

あるが、 りや する町 館内の 管理者 うな事態になっても影響の少ない ۲° 地元客の両者に対応するメニューづく 通して日帰り入浴やレストランを利用 ことでさらに地元客が増えるのでは 町 を務める今井裕和さんだ。これまでも 体感できる宿として評判の 13 民 かという。 ターを増やすことでコロナ禍のよ 施設運営が求められる。 シー・リゾートフェ の利用があったが、 お客様の満足度を向上させ、 の方が多い。 レ 「ゆげフーヅサービス」の代表 ストランや入浴施設などでの 「フェスパの場合、年間 そのため観光客と スパ」 橋が架かっ 大変では の指定 ンラン 経営 た IJ な

働きたいという人が出てくるのではな

か。

私としても、

できる限り地

元

方を雇用したいと考えている」と話す

くなったことで、

岩城島からもここで

集まらなかったスタッフの採用

が、 なか 変化する人と物の流

一弓削

・生名の住民だけではなか

城

、橋開通を機に改善されることを期待

てい

る。

船のダイ

ヤなどの制

約

がな

どの 行なう レモ の流 を目指 岩城島でも架橋を契機とした人や物 れの変化に期待を寄せる声がある。 を中 してい 工. フ 品 ル 心 1 に生果およびジ きたい」と展望を語った。 露地野菜の レ モ ンファー 生産 ユ ム」を経 販売を 1 ス な

放棄地を借り上げるなど事業の選択肢

1 0

バ

幅

が広が ア ル

つた」 イトの

と話す。 雇用の面

また、 でも、

れ

てい 要が 内

ない。 神び

ているため、

生産

が追い

付

生

営する古川泰弘さん [※1]

は、

瀬

戸

|産の

モ

ンの評価が上がっていて需

名や弓削島

の農家と協力したり、 岩城橋の開通によって、



中のイチゴ栽培施設。完成後は町内の児童・生徒にイチゴ狩 り体験を提供したいという。

通

!称マット) さん

リットが見込まれる。 に制約のあったスタッフの就労条件の改善や、働きに来ることができなかったスタッフの就労条件のまで船のダイヤの関係で就業時間など

子どもたちへ 出できるように取り組んでいきたい」 ちの愛郷心を育んだり、 その時を見据え、 ひとつになるのではないか。 が大人になった時に初めて真の意味で けではない」という。「今の子どもたち 分たちの畑で採れた果物や野菜を使っ る施設ができあがる予定だ。 通には間に合わなかったが、 た体験学習を岩城島で実施できない しており、 ムの提供や雇用の拡大など、子どもた ってすぐに旧三町 しかし古川さんは、「架橋したからと 思いを口にする。 イチゴの栽培に着手。 これまで町外で行なって イチゴ狩り体験を提 島での体験プログラ 村が一体化するわ すでに行動に移 働く場所を創 岩城 近日 同 私たちは 時 橋 中に の開 に自 供 か

> 設中。 設型の ント たら。 事には繁閑があるので、 してい りも体に優しい食べ物をしっかり提 カフェ 合わせて雇用の平準化にもつなげられ たケー も開催したい」 けるようにしたい。 サイクリストなどを集めたイベ の経営はトントンで良い。 カフェも今夏の開業を目 キや飲み物を提供する加 畑 で儲けを出せるように 将来計画に カフェを組み また畑の 指し 工. 何よ して、 場 仕 供 つ 建 併

## の人々の交流の人々の交流の人々の交流の人々の交流の人々の交流の人

て説明する。

海の駅「ふらっとして運営にあた として運営にあたっているのは、平 の指定管理者



海の駅舎 「ふらっと」の前にて、マットさん・ももこさん夫妻。

立ち上げを機に、「ふらっと」の運営や 九月の個人事業「Kamijima Tours」の しながら収入を得ていたが、 人の手伝いなど複数の仕事を掛け持 訪問で移住を決意した [※2]。 や島の方々の優しさに触れ、 友人を訪ねた際に、 F, とももこさん夫妻だ。 | 寿司居酒屋ととや」のアルバイトや 出身のマットさんは、 ンバウンド向けの町内ツアー、 都市 ニュー 弓 にはない 削島 令和元年 ジーラン 当初 П 自 住 目 0



現在は「Asanagi」「Yūnagi」の2艇態勢でセ 体験を提供している。

が、 仕事ができている感じ」だと話 働 今は人と人とのつながりの中 く場所を見つけることに苦労した か ら

旅

と

うになった。 タサイクル・

在では、

これらを含め、

バイクなどを手掛けるよ

ŋ

おもに 兀 つの 仕 現

!事を兼務して生計を立

てているという。「最初は言葉の壁もあ

自分 たい。 ので、 動範囲が広がって体力的にきつくなる クリングツアーを行なっ 容に大きな変化はない Tours」としての自分たちの仕事 ると思った」と話すのは、 られたら嬉しい」と思いを口にした。 もたちが英語を活かせる環境をつくり マットさんとももこさんは が増えている上島町の現状について、 と笑う。 いう。「ゆめしま海道全体を使った新し できる体験プログラムの ことで子どもたちの夢の選択肢を広げ 弓 体験 岩城橋の開通については、「Kamijima 削 ならでは 原付ツアーを増やしていきたい 島に来た時 国 プログラムを開発したい。 自身を含め海外からの移住者 内外のさまざまな人に接する の新しいことを始 に、 ここで が、 ているが、 幅は広がると 島 7 なら 日 ットさん いめられ この子ど 「で提供 何 サイ Ď 移 内 か

民

での暮らしを決意したとい

う

ル 彰 士 美し 七年に移住してい どをめぐり弓削島へたどり着き、 しながら東南アジア諸国、 族を訪ねる形で平成三○年に上島町 と同じニュージーランド出身のサム するきっ れた。 は、 の  $\exists$  $\mathbb{H}$ ッ 方々の雰囲 61 知 島の風景や外国人にも優し 先に弓削 0 (通称サム) さんだ。 仲 彼の一 かけともなっ こであ の運営も担う斎藤サミュ 家は、 り、 気に惹かれて、 島に移り住 た。 彼が弓削島に移 た船 サムさん自身 ヨットで航海 んでい マットさん 大工 奄美大島 弓 同二 た家 削 € √ 住 4 エ 住

訪

 $\lambda$ 

方を提案したい。 はもちろん、 自ら手作りした木造のカタマランヨッ わ る トを使ったセーリング体験を提供する 瀬 れ その後、 旅ヨット」 てい 戸内海でセー ないことを知ったサムさんは 世界でも屈指の美しさを誇 を立ち上 戸内海での 特に県内の若い人た リングがさほど行 上げる。 新 しい 上島 · 遊び

どの魅 平成二三年のこと。 を膨らませる一人だ。 社長の浦安元太さんも、 るカフェ と自社のマダイを使った料理を提供、 町 ことの になったら」 ちや家族連れなどが、 め 泊業者や小売店などに生産物を卸 で営んでいた養殖業を、 の全線開通による交流の拡がりに期待 0 囲気も変わっていくのではない なったように感じる。 0 になる」と、 の島が結ばれたことで、 -開通につい ンする形で元太さんが継 現在 1 「城島でマダイ養殖の「浦安水産 内の美しさや楽しさ、 選択肢が増え、 (力を再発見するきっかけづくり ンター ではお中元やお歳暮などの 「たい」 というサムさん。 ネ て「上島町全体が大きく 屋」を経営する三代目 今後に期待を寄せた。 卜 以来、 での 祖父の代 より遊びやすい これから町 自分たちの 東京か 通 ゆめしま海道 体験できる 癒しの 県内外 いだの 信販売も始 。 ら U か か。 ら島 の 力 住 0 兀

に

り物、 が増えているとい お食 61 初めなどお 祝 う。 € 1 の 席 で 0

に

町

を訪れるサイクリ

ストなどに、

域

コミュニティが大きくなった。

新

た

城島だけでなく弓削島や生名島など

は土 くコ レー 業したのが イクリスト 元の方々はもちろん、 レモンなどを使ったカルパッ ーは自家製の新鮮なマダイ、 の倉庫を改装して、 える場所を作りたい つ そんな元太さんが 日限定の営業だが、 1 など。 て元太さんは ヒーも このほか元太さん自ら の来店も多い。 一たい屋」である。 おすすめだとい 令和三年七月に 」と養殖場 「島に若 架橋によっ 県内外からの 開店以来、 将来の う。 チ 地 € 1 メニュ の近 人が 3 元産 て地 展望 現 Þ が サ 地 挽 開 集 在 力 0



浦安元太さんは、架橋による交流 の拡大に期待を寄せる。

宿

に

地

宿 は

許

## 島で自分らしく生きる

題は養殖業の安定で、 食材・食文化も紹介してい

近年

のエサ代

きたい。

課 0

費の高騰がネック」だという。

ブン しから古民家のリフォーム工事まで、 営する川畑良文さん・ちや子さん夫妻 を開 に は 元 以上の空き家を改修した民宿 弓削の宿」が開業した。 令和元年一○月、 あこが までに二年半を要した。 自分たちの手で行なったのでオ 居を建てるところ が 住みながらでは保健所からの営 の方々の協力も得 下りず、 くのは長年の夢 れの地の まず敷地内 弓削島 瀬戸 か なが ッだっ 5 内 この宿を経 始 5 た。 海 に自分た にある築百 特に、 めること 0 物件 基本的 島 で民 民 搩

家 年

に

なったので、

苦労の連続だった」と、

0

当時を振り返る。

んは一 使ったフルマラソンなどのイベントの 橋の開通に対しては「観光客が増える なっている」と良文さんは笑う。 じめ地元の皆さんには、大変お世話に にたまたま立ち寄った弓削島の、 と結婚したのは二○歳の時。ちや子さ るまで、『民宿 にまとまっているところや、人情に厚 な自然と暮らしの利便性がコンパクト オートバイで瀬戸内海を巡っていた時 の後、三人の子どもの独立などを機に、 たい、民宿を営みたいと願っていた。そ ンだった良文さんは、 久根市育ちの良文さんが、 - 移住や民宿の開業、現在の暮らしに至 念発起して五一歳で会社を早期退職 地域の方々の人柄に惹かれたという。 ドミニカ共和国生まれ、 いつか夫婦一緒に働ける仕事をし 九歳の若さだった。 橋でつながった四つの島を 中塚』の中塚さんをは 転勤や出張も多 サラリー ちや子さん 鹿児島県阿 豊か

> 寄せた。 開催も一 う良い機会にも 町を知ってもら 多くの方に上島 海道の完成は、 では。 なる」と期待を 面白 ゆめしま € √ の

町の空き家問題 民宿を営む傍ら 月、良文さんは

令和三年一〇

った。 貸したい人と借りたい人をつなげるお 自分の経験なども活かしながら、 はまだまだこれから。 町の活性化と町づくりの推進を目指 の改善、 人口一万人!」と今後の意気込みを語 手伝いをしたい。 た。「できたばかりの組織で、取り組み NPO法人空き家よくし隊」を設立し 移住者・定住者の増加による 目指せ、二〇年後の 移住者としての 家を

は、

パンやベーグル、

自家焙煎コー

Ł

ーを提供する「Kitchen 313 Kamiyuge (以下、313)」を経営している。 神戸出身の宮畑さん夫妻は、

自然に

真・執筆にと町内外で活躍。真紀さん ち上げ、事業プロデュース・編集・写 業「瀬戸内編集デザイン研究所」 さん夫妻だ [※3]。 周平さんは個人事 実現しているのが宮畑周平さん・真紀

を立



を開くのは長年の夢だったと話す川畑良文さん。

同じく弓削島で自分らしい生き方を

と説明する。 際に生活をしていく上では、 事をしているということもあるが、 ことができ、安定した暮らしができる」 る術が複数あった方が互いを支え合う 収入を得 実

住した。現在、

(周平さんが313のコー

紀さんの父親の故郷である弓削島に移

ころで暮らしたいと、

平成二三年に真

囲まれ、

仕事と生活の場が一致したと

真紀さんは「313の営業は、 ·めしま海道の全線開通について、 これま

行

ことについて、「個人個人がやりたい仕 二人がそれぞれに事業を行なっている ヒー焙煎の担当を務めてはいるものの)夫婦

城島 度対岸の因島へ渡り、 城島からの来店者も増えるかもしれな になって便利になった。 回程度の割合で行なってい で通り火・木・土の週三日間。 の移動販売は、 っていたものが、 への移動販売も、 続けていきたい。岩 陸路で行けるよう そこから岩城へ 架橋前は船で一 これからは岩 た魚島 月に一

う。 とは、 良 とする場合、 であれば当日中に東京や大阪などへ出 を使って打ち合わせもできるし、 刺激を得られるという面で都会の方が もに自然と島人の感覚になってくる」 のくらいの時間が経過すると、心身と わゆるクリエイティブな業務を生業 上島町に移り住んでから十年余。「こ しかし、 のでは、と感じる読者もいるだろ 周平さんの言葉だ。彼のように、 仕事の多さやさまざまな 周平さんは「オンライン

宮畑周平さん・真紀さん夫妻。「Kitchen 313 Kamiyuge」にて。

不便は感じない。インスピレーション

ることもできる。

仕事をする上で特に

を口にする。と、島暮らしの良さを口にする。と、むしろ四季折々の顔ををで溢れている」と、島暮らしの良さをで溢れている」と、島暮らしの良さをで溢れている」と、島暮らしの良さを口にする。

のもとを訪れる人も多いという。生き方に共感し、相談などで真紀さんはない」と話す宮畑さん夫妻。彼らのはない」と話す宮畑さん夫妻。彼らのががどうあるか/あり

## 転入超過を実現

あり、 地情報バンクの刷新、「空き家活用事業 みじまライフ」の開設や空き家 このうちの一つが上島町(一六人増)で であった (詳細は「しまのうごき」参照)。 過 年に転入者が転出者を上回る「転入超 七〇〇ある過疎市町村のうち、令和三 総務省公表資料によると、全国 (社会増)」となったのは九四市 移住定住促進サイト 瀬 ・空き 戸 内か 町村 に約

成果だととらえることができる。住促進に向けた試行錯誤の積み重ねのなど各種補助制度の充実といった、移補助金」「新規出店者店舗改修補助金」

集」(離島留学)などによって、町内の実施している「弓削高校魅力化プロジンを作っている「弓削高校魅力化プロジンを作っている「弓削高校魅力化プロジンをキャリア教育をサポートする公営塾やキャリア教育をサポートする公営塾やキャリア教育をサポートする公営塾やキャリア教育をサポートする公営塾学生を募る「弓削高等学性を募る「弓削高等学性を募る「弓削高等学性を募る「弓削高等学性を募る「弓削高等学性を募る「弓削高等学性を募る「弓削高等学性を募る「弓削高等学性を募る「弓削高等学性を募る「弓削高等学性を表す」に

任し、 所は弓削高校内に置かれている。 んによると「公営塾には五人の 隊」としてゆめしま未来塾の講 令和三年度に (すべて島おこし協力隊) 現在は塾長を務める来住美里さ 島 (地域) がおり、 おこ スタッ 師 高校 事務 に着 協 力

専門学校や大学進学、就職などさまざら、連携して生徒をサポートしている。ら、連携して生徒をサポートしている。らが連携して生徒をサポートしている。

まではあるが、各人がキャリア教育を



がっている。とともに、知

中学生の弓削高校への進学率を高める

留学生の獲得などにもつな

公営塾「ゆめしま未来塾」の塾長を務める来住美里さん。



岩城島をはじめ上島町の特産品を取り扱う「いわぎ物産センター」。

和

四

年 度

上島町では離島留学

生

れ

は

たいし めに、 こうい 二年生を対象に弓削高卒業生による座 増やすことも重要。 ためにAI教材も導入して けでなく、 を入れている。 活躍している大人や学生との交流 の弓削高や公営塾の認知を高めて 談会や出張授業などを行なって に弓削高校に進学する地 と展望を口にした。 った取り組みを継続 塾では町内外において多方 教科学習サポー また、キャリア教育 現在、 元 町 の中学生を ιV 1 - の強化 内 る。 町 1の中学 ιý 、るが、 内 61 同 面 当 で 時 0 だ 力 に

だ。

61 に ス

げてあげられるようにしたい。

そのた

徒に対しても は多様だと感じる。

可能性や選択肢の幅を広

しかし、どんな生

している」

と

う。

公営塾の今後

て「弓削高生の進路に対する考え方

通して進むべき道を決めたことは共通

きたい」と上村町長は意気込みを語る。 もちろん、 拡充され、 用 支援などを受けながら、 なったことが非常にありがたい。 った。一離島活性化交付金のメ の寮 の暮らしや の建設 産業振興や移住促進など住 寄宿舎整備ができるように に向 j € √ 町 けた取 づくりに り組みが 高校魅力化は 努め ニュ É 始 1 61 0 が ま

> 学校の存続に向け令和五年度から て達成される」と話す。 内経済の活性化は、 づくりがなされてきている。 島留学の実施を目指すなど、 る水産業の振興などに加え、 位置 岩城 てい な 0 両島は ゆめしま海道の全線開 c J 61 ある佐島 ない 地域だが、 旧魚島村 するのは、 橋の下を抜けたヨ 島々にも 町 '内でも特に少子高齢 向 0 魚島および高井神 魚島では主産業であ かう。 橋で他島と結ばれ その恩恵が架橋 行き渡ってはじ 町 佐 ット 民 通 島 上村 魚島 地道. は による 0 丸とな そ な島 化 町 の 小 の べ が め 町 長 離 中 1

文・森田 /写真・ 小原佐和子) 引き続き注目していきたい。 って地域づくりに邁進する上島町

ついては、本誌二五〇号もご参照くださ ※3:宮畑周平さん・真紀さん夫妻に ※2:本誌二六五号参 ※1:古川泰弘さんについては、本誌二一三号もご参

